



美しい海、青い空、そして今も大量のガスを出し続ける火山の島、三宅島。私が三宅島に来たのは今年の四月、自治医大を卒業して七年目の春でした。四年目と五年目に勤務した小笠原村父島に続く二回目の離島派遣です。

竹芝桟橋から船で六時間半、島に着いた時は早朝の暗闇の中、火山ガスの硫黄臭さで不安も増しましたが、生活するうちに徐々に慣れてきました。二〇〇〇年の火山の噴火で全島民が島を離れ、〇五年に避難解除になりましたが、まだ戻れない地区があります。火山ガスの濃度

噴火の影響今も

が高いために居住が許可されな
いのです。ガスと風雨にさらさ
れて崩壊寸前、もしくは既に崩
壊してしまった家屋もあります。
す。

す。そんな状況でも三千人近い人
々の暮らしています。高齢化率

患者のすべてに気を配る

が40%前後で、「足腰が痛いねえ」と言いながらも山で畑を耕しているおじいさん、おばあさんがたくさんいます。子どもたちも島で一つずつの保育園、小学校、中学校、高校で元気に過ごしています。

判断早くて的確に

この島に来て、あらためて医療の難しさを感じています。三宅村では三人の医師で三千人近い人口を担当しています。病気を抱えている人の多くはこの診療所に通院しています。中には定期的に都区内などの医療機関に通院している人もいますが、急に体調が悪くなれば、この診療所にかかります。責任は重大です。

この診療所で対応できる病気なのかを考えながら常に診療しています。対応が難しければ、早急に専門病院へ紹介する必要があります。

があるからです。地理的条件や家庭の事情などさまざまな理由で紹介してもすぐに受診できない人もいます。だからこそ早くて的確な判断が必要になります。

また、自分が得意とする診療科だけでなくすべての診療科で判断をしなければなりません。その人の命に対する責任がのしかかっています。

でもこれはどこで医療をしていても同じことなのです。どんなに医療が専門分化していても、そのとき患者さんを診る一人一人の医師が、患者さんのすべてに気を配らなければいけません。専門分野を中心に診ますが、それ以外にも注意を払い、異常を感じたら他の専門家に紹介する。離島ではそれが少し難しいだけなのです。

医療は難しい、責任も重い、それでもやりがいのある良い仕事です。それをあらためて気付かせてもらいました。私は島に来て本当に良かったと思っています。

（次回予定は三重県）

たけい だい
武井 大

24期生、2001年卒



火山ガスの高濃度地区内の集落。まだ居住が許可されず、崩壊の激しい家屋が目立つ

三宅村国民健康保険直営中央診療所

【私の勤務地】三宅島は東京竹芝桟橋から船で6時間半、約170km南にある島。全島が東京都三宅村に属する。来年春には念願の羽田との航空路が再開される見通し。診療所は12床の有床診療所で、歯科医院を除くと島内唯一の医療機関。自治医大卒の常勤医師2人と、都立病院から1—2週間単位で派遣される医師の3人体制。